

まちひとしごと

Vol. 57

有限会社 日進堂
代表取締役 月館 孝昭 さん

愛され続けた歴史に幕を下ろす 感謝の気持ちを皆さんに



5 月末をもって、100年近くにわたる長い歴史に幕を下ろし閉店した有限会社日進堂。月館孝昭さんは、その3代目としてこの町で生まれ育った。学生時代は、水泳や卓球をするなど、体を動かすことが好きだったと話す。幼い頃から本に囲まれて育った環境が、今につながっているという。

「当たり前のように本が近くにあったので、昔から読書をするのが好きでした。その影響もあり、将来を考えるにつれて、自然と家業を継ぎたいと思うようになりました」

高校卒業後は道外の大学に進学し、卒業後は埼玉県の本屋で2年間修行。日進堂に戻ってからは、販売する本の選書や事務機器の保守点検などを行ってきた。本は時代や流行にあわせて売れ行きも変わるため、月館さんは、本はその時代を表していると話す。

「本を選ぶときは、自分の好きな数学や工学系のジャンルを混ぜるなど、遊び心を持って選んでいました。自分が選んだ本をお客さんが手に取ってくれたときは、うれしかったです」

漫画や小説などの本だけではなく、文房具や雑貨まで幅広い商品を販売する日進堂は、子どもからお年寄りまで多くの人に愛されたお店だった。今回、そんなお店を閉めることに寂しさも感じているという。

「日進堂という名前がなくなる寂しさはありますが、今回このような決断となりました。長く愛してくれた常連さん、これまで来店



▲昭和20年代の風情のある店内

してくれた皆さんに感謝の気持ちを伝えたいです」

昭和2年の創業から、ずっと駅前通りの同じ場所に店舗を構える日進堂。月館さんも長い間この場所で暮らし、移り変わる町の様子をその目で見てきた。

「子どもの頃から慣れ親しんだ自然や環境は、これからも残していつてほしいです。時代によって変わることは仕方ないことですが、急激な変化ではなく、町の良ところは残していく地域であってほしいです」

ずっと変わらぬ場所にある『まちのお店』は、私たちに安らぎや懐かしさを感じさせてくれる。

今後変化が続く俱知安町だが、そこに行くと、懐かしい『まちのお店』がいつも私たちを迎えてくれる、そんな町であり続けてほしい。



▲昭和30年代の懐かしさを感じる店構え

※まちひとしごとは不定期連載です